幼児の言語生活の実態

――二歳児のばあい――

池田恭仁子

一　はじめのことば
二　文章期
三　いろいろな表現法
　㈠時称の表現
　㈡質問
　㈢擬音語・擬態語
　㈣接続の関係
　㈤陳述
　㈥総括表現
四　結びのことば

一　はじめのことば

人々の生活が皆それ〴〵違うように、幼児の言語発達の過程にいちじるしい個人差があるのは当然であろう。私の子供に、昭和35年6月30日生まれの男児がいる。昭和37年10月現在満二歳三か月になる。私は、この幼児の言語生活がどのように展開していくかを観察したいと考え、新しく増加していく言語を毎日採集した。記録の方法はいろいろ考えられるが、私は手はじめとして最も単純なこの方法をとったのである。

久保良英博士は『児童研究所紀要第五巻』（大正十一年 1922）において、「各歳に於ける語彙の調査は、従来その子供が新に獲得したる言語を毎日記帳整理することが行はれて居たが、之は労多くして却って粗漏に陥る」として、「満二歳の誕生日を中心として前後十日間即ち合計三週間に於てその子供が使用する凡ての言語を精細に記入する方法を企て」、「その結果は前の方法よりも却って正確の

やうに思はれたので、同様の方法によりて」半歳毎に語彙を集めておられる。したがって私も子供が満二歳半になれば、久保博士の方法によってことばを集めてみようと考えている。

この報告は、満一歳の昭和36年7月から満二歳三か月の現在までの一年三か月の期間のうち、あとの部分をまとめたものである。（この場合、模放したことばはほとんど記載していない。）すなわち、はじめの三か月は、もっぱら単語習得を中心とした一語文の時期であり、あとの一か月は文構成の時期で、そのうち文章期にはいったのは、満一歳からかぞえて七か月目であった。はじめて二語文を記録したのは満一歳三か月の時（久保博士の長男は一年五か月半、三男は一年七か月）であるが、それから約一か年の間に急速な発達を見せ、現在では最低限度のコミュニケーションは営めるようになってきた。私は、粗雑さを免かれぬことを知りつゝ、毎日の生活の中での子供の言語の発達過程をとおして、国語教育の可能性の限界をのぞき見るような気持で幼児のことばを書きとめたのである。したがって統計的処理は第二義とし、国語教育の立場から発達の過程を流動的にとらえることをねらいとした。

さて、この研究報告の計画は

一　序

二　一語文
　　――単語の分類――
　(一)名詞
　(二)代名詞
　(三)動詞（語幹のみのものも含む）
　(四)形容詞（形態語と情意語）
　(五)形容動詞（話しことばと書きことばの問題）
　(六)感動詞
　(七)副詞と連体詞
　(八)接続詞
　(九)助詞
　(十)助動詞

三　文章期

四　いろ〳〵な表現法

五　結語

のつもりであるが、「一語文――単語の分類――」の章は省略し、次の発表の機会を待ちたいと思う。

二　文章期

一語文では語彙数が考察の中心となり、多語文になれば、文の長さが一つの問題になると考えられるが、文章期においては、文の数や表現のしかたが考察されねばならぬだろう。精神年令の発達とともに言語能力が増し、一語文から多語文へと発達、さらに自己の意志を伝え他人と思想を交換しようとして多くの表現の要求が出てくる。はじめは、同じ表現のくり返ししかできなかったのが、やがて異なった表現をまとまった思考の形として続けて言うことができるようになる。時期的に言えば私の子供のばあいは満一年七か月で、この頃は語彙の習得、発音の正確さなど日増しにめざましく、一日に一語か二語は新しい語や表現を自分のものにしていく。

次の「いろいろな表現法」の章の参考にもなるので、シュテルン（W. Stern, 1928）の研究による言語の発達段階をあげてみよう。

それは「大体わが国の幼児にもそのままあてはまるのであるが、第一期は一―一才半で、その発音のかたちからいうと、片言であり、意味からいえば一語文の時期である。第二期は一才半―二才で、幼児は『それなに？』『これ？』という工合に事物の名をつぎつぎと尋ねて、知っている語の数が急に増加していく。その内容も、名詞のほかに動詞や形容詞とかが用いられ、その話す文章も一語文ではなくて、二語文または多語文となる。第三期は二―二才半で、動詞の語尾が変化して、時の区別ができるようになる。しかし、まだ内容は事柄の羅列にとゞまっていて、単文である。第四期は二才半以後で、複雑な内容を表わし、形式は主文と従属文とからなるものになる。この時期には助詞を使用するが、その誤りはしばしばある。」（『児童心理学入門』中村秀、有信堂文庫、昭和二十九年）第三期の例としては「見タ、ポッポ見タ、チェン見タ」（坊やは先に汽車を見た。）久保博士の例があげてあるが、私はこれを文章期の考察の対象とみて、こゝで自分の子供の例を出現の順序を追って記すことにしよう。

37・2・1　パパ、アッチ、イッタ。ガッコウ、アッチ、イッタ。
（初出、満一年七か月）

パパ、ガッコウ。（パパは、あっちへ行った。パパは、学校へ行った。）

37・2・5　ママ。（さじを出してママに渡す。）

ボク、ベチャベチャ。

母「ママが食べさせてあげようね。ぼくがするとべちゃ〳〵になるわね。」

（昨日、母親から言われたことを、きょうは自分から言う。）

37・2・12　コッチ、ブーブー、ナイ。（いつものところにバイクがない。）

パパ、ガッコウ、アッチ、イッタ。（パパが乗って学校へ行った。）

37・3・2　（昼寝から目覚め、ねむいので泣きながらくり返す。）（満一年八か月）

タンタ、アーア。タンタアーア。（靴下がぬげた。）

オキタ、オキタ、オキタ。

ヌゲタ。ヌゲタ。（ぼくが起きたらぬげている。）

37・3・15　（動作とともに言う。）

アラウ。（手を洗う。）

ヒトリ、アンガ。（ひとりでいすにあがる。）

タッキン。（石けんをちょうだい。）

モウ、イイ。

37・3・17　ガラス。（これはガラス戸だ。）

アッチ、アマド。（あっちのが雨戸だ。）

（自分で区別して言う。識別の力が表われてきたのか。）

37・3・18　パパ、アッチ。（パパは、あっちへ行った。）

ブーブー。（ブーブーに乗って行った。）

スグ。（今、パパはいないけれどすぐ帰る。帰ったらブーブーに乗せてもらえる。）

37・3・22　ボク、アーア。（ぼくの服のボタンがはずれてい

る。）

ママ、ハメチ。（ママ、はめてちょうだい。）

37・4・2　ボク、オンモ、イコウ。バアチャント。バアチャン（満一年九か月）トイコウ。

37・4・13　ボク、アーンアーン、ナカナイ。ボク、ツヨイ。（ぼくは泣かない。強い。）

37・4・16　ボク、フイタ。ボク、キレイナッタ。（ぼく手を洗ってふいた。きれいになった。）

37・4・21　（雷がなり、夕立のような大雨が降る。）コワイ。スゴイ。

37・4・23　アカイ、ブーブー、キルカナ。キナイカナ。（赤い自動車が来るかな。）

母「赤いブーブーくる？」

キナイ。

母「こないね。」

37・4・30　（ゆで卵の皮をむきながら）ヨク、ムグ。ヨク、ムグ。ヨク、ムグ。ボク、ヨク、ムグ。タマタ、ヨクムグ。

かりに一年七か月から一年九か月までの三か月間の記録をたどってみると、だいたい二文か三文の表現が動作とともにあり、それらがしだいに事柄の羅列から完成した文および文章になっていく様子が観察される。なお、これらのなかには、最後の例のように、「ぼくは卵をよくむく。」と一文にまとめて考えることもできるが、私の考えとしては、子供のせい一ぱいの表現が一文、一文に出ているのであって、それを直視することが必要であろうと思う。

三　いろいろな表現法

(一)時称の表現

「ワンワン」という一語を、「犬がいる。」「犬が行った。」「犬を見にいこう。」など幼児の体験に応じて使う一語文に二語文が加わり、さらに三語文へと進む頃、動詞の数も少しずつふえて、過去・現在・未来の時称の表現が出てくる。その間、早くも打消しの表現は満一年四か月に「アッイナイ」（熱くない）、一年五か月に「バアチャンナイ」（おばあちゃんではない）と言っている。

過去表現は、満一年四か月に「アッタ。」を言ったが、一年五か月に、

36・12・8　ニャン。（猫をよぶ）アッチ、イッタ。

36・12・9　チョウチョ、アッチ、イッタ。（蝶が向こうへ行った。）

などしだいにはっきりと言いはじめ、これが最初の三語文であって過去表現がちょうど三語文の出現と一致したわけである。この「（なになに）アッチイッタ」の形は、しばらくくり返し使用される。それから、「オキタ」（起床）「タベタ」（37・2・10）「キタ」（37・2・13）「デタ」（37・2・14）などどんどん使われるようになる。

それより前に、未来時称（助動詞「う・よう」をともなった用言の未然形）がはじめは意志表現として使われており、それも「行こう」の一語に限られていた。

36・10・12　母「たいたい（魚）買いに行きましょうね。」

タイタイ、イコイコ。

36・10・16　タイタイ、イコ。タイタイ、イコ。（池の金魚を見

に行こうとする。）

36・12・9　アッチ、イコ。

現在形は、ことばの中にようやく動詞がめだってくるころ、満一年六か月になって現われる。

37・1・10　ハク、ハク。

母「あ、はくの。くっく（靴）、はきましょうね。」

37・1・11　アッチ、イク。アッチ、イク。

37・1・23　ニング。（脱ぐ）

37・1・27　ミング。（見る）

形容詞ではそのころ、「チャムイ」（寒い）、「ボク、イタイ。」などがある。おもしろいことには、同じころに自分ということを知りはじめ、「ボク、ベベ」（ぼくの服）、「ボク、ボチャ」（ぼくはおふろにはいった）、「ボク、マニャ、ネンネ」（ぼくは、まだねんねする）などの表現が並行して見られる。

やがて、一年八か月ころには

37・3・15　ハク。……ハイタ。

37・3・18　モッテクル。……モッテキタ。

と動作とともに連続して使うようになる。

37・3・1のメモには次のように記している。

「すっかり幼児期らしい傾向がみえる。足も丈夫になり、よく歩く。甘いものが好きになる。よく遊び、よくねむる。言葉をはっきりとまねる。過去形をしだいに多く使うようになる。」

また志向形もこのころには、「ボク、ネンネショウ。」「タベショウ。」「ココ、アソボウ。」「ボク、シッコショウ。」のようにいちじるしく多くなっていて、一年八か月末には「特にきょうは使用がめだつ」とメモしている。

さらに一か月後の昭和37・4・13（一才九か月）には、

パパ、フロ、ハイル。　父「ぼくは？」

ボク、フロ、ボチャ、ハイッタ。

（現在や過去を使いわけて言えるのがおもしろいらしいとおばあちゃんがいう。その通りだ。）

とある。やがて一才十か月になって、

キョウ、ラッシー、アル。（きょうテレビの「名犬ラッシー」がある。）と、きょう、きのうの観念がおぼろげながら出てきて、以後しきりに使おうとするが、正確に使いわけられるようになるには、いさゝか時日を要するようである。

なお、つけ加えれば「アイティル」（開いてる）など「テイル」の言い方が一年七か月ころから少しずつ出てくる。

(二)　質問

幼児の言語は、おとなの模倣と一方では物の名を問うことから習得されていく。シュテルンは、第一質問期（物の名を問う）と第二質問期（どこ、いつ、どうして等）とを挙げ、前者は第三期初（一才半～二才）に後者は第五期～六期（二才半以後）としている。（P・43『児童の言語』矢田部達郎）私の子供のばあいは、満二歳前後の観察にしたがって次の二つの形式に分けて整理してみた。

一つは、疑問式質問としてみよう。通常多く使われる質問形式で疑問詞を用いるものと考えればよい。

ドコ？（一年三か月、初出）

ドッチ？（一年三か月）
ドコダ？（一年八か月）　ドコダロウ？（一年十か月）
ナンデショウ？（一年九か月）
ナニシテルノ？（一年九か月）　ナニ？（二年）
ドコ、アルノ？（一年十か月）　ドコニアル？（二年）
コレ、ドコイクノ？（二年）　オジイチャン、ドコニイクノ？（二年）
オジイチャンハ？（「どこ」を省略）（二年）
ドウシタノ？（一年十一か月）
ドウシテ？（一年十一か月）　ドシテ、オチタノ？（二年）
ダレニモラッタノ？（二年）
ドレダッタカナ？（二年）
ボクノモッテルノ、ナニカナ？（二年一か月）
ドウシマショウカ？（二年二か月）　コレ、ドウヤルノ？（二年二か月）

いま一つに、反問式質問ともいえる形のものがみられる。

モウンスダノ？（一年十一か月）
イコウカ？（一年十一か月）
ママ、カンデル？（二年一か月）
アレ、ハタカナ？（二年一か月）
コレアシタノ？　母「ちがうよ。きょうのよ。」　キョウノシンブン？（二年一か月）
オバアチャン、ナオッタン？（二年二か月）
ママ、ヒコウジョウヘイキタクナイ？（二年三か月）

これらを時期的にみると、疑問詞を用いた質問「ドコ」「ナニ」「ダレ」「ドウシテ」などがおよそ一歳半～二歳、反問式の質問が二歳以後と考えることができる。

㈢　擬音語・擬態語

擬音語は、幼児が習得しやすいものとして重要な位置をしめる。早くから「ワンワン」（犬）「ブーブー」（自動車）と一語文としてしきりに用いられるが、擬態語もまた、いろ〳〵使われて幼児の言語生活を豊かに生き生きとさせているようである。「ピョンピョン」だの「ドシン」などのことばを発するときには動作を同時に行なうのであるから、幼児にとっては言語活動が身体全体の活動となっているようにさえみえる。

最近では、

コロンダン。ステンコロリントコロンダン。（二年二か月）のように、あとからつけ加えて言うこともしばしば聞かれる。すなわち、文論・文章論的に言えば、この擬音語・擬態語が多く倒置の表現であったり、主語述語のみの基本文型の次に修飾語を加えて同じ文をくり返す表現だということである。表現を豊かに的確にする方法として自然に身につけたものであろう。考えてみれば、母親である私やおばあちゃん、また父親も擬態語を多く使って子供に話しかけているということにもなる。

今までに収録したものを列挙してみると次のようである。ここでは、名詞や動詞の代用として使用されたものを省き、副詞として用いられたものを月令を追って順に表にしてみよう。

一年一か月　パクパク　父「牛が草をたべてたね。」「パクパク。」（小さい字は、はっきりしない発音）

一年二か月　ジャー　（水を流す音をまねる）
カリカリ　（テーブルをけって音を出して言う）
ゴーリゴリ　（ひっかく音）
クルクル　（まわる様子）
ダーン　（とびおりる動作とともに言う）
ゴー　（ひこうきの爆音を聞いてまねる）
一年三か月　アーンアン　母「どんぐりは、どういってないたの？」「アーンアン。」
ウオー　「ワンワン、ウオー。」（二語文の最初）
母「そう。わんわんがウォーっていってるわね。」
ゴン　（頭などをぶっつける時いう）
チリン、チリン　（鈴を手にもっていう）
ブーラン、ブーラン　（自分でころがりながらいう）
ゴロゴロ　母「雨戸をしめましょう。」
一年四か月　ガラガラ　「ママ、ガラガラ。」
一年半　ピカピカ　（電灯がつく時）（光っている）
プカプカ　（おもちゃのあひるをお湯に浮かせている）
一年七か月　ドシン　（やぶる音）
ポチャン
バリッ
ゴシゴシ
タッタッタ　「タッタッタ、アッチ、イク。」（走っていく）
ガタンガタン　（車の音をまねてあそぶ）
一年八か月　コツン　「ボク、コツン、アタマ、イタイ。」
フラフラ　「ポンポンポン、ボク、フラフラ。」
母「ポンポンとなげて、ふらふらになったね。」
ポンポンポン　（ボールをなげる時）（たゝく時）
パチン　「パチン、ハメナイ。」（ぱちんとはまらない。）
一年九か月　ガラッ　（戸があく音）
ピョンピョン　「カエル（蛙）、ピョンピョン。」
一年十か月　ワンワン　「ワンワン、イッテル。」（わんわんと、ないている。）
ポチャポチャ　「タイタイ、ポチャポチャ、オヨイデル。」
チャンチャン　「ニイチャン、チャンチャン、オドッテル。」
ウー　「ノド、ウー。」（のどを見てもらってげーといった。）
ゴチン　「アタマ、ゴチン。」母「いたい。」
「ママガ。」母「ママがいたい。」
ブー　「ブー、イウ。」（そうじ機がブーという。）　母「そうね。」「ハメテ、ブー、イウ。」

ドボン　「オバチャントコ、イシ、ドボーン。」
（おばちゃんの家の前で、石をドボンとなげた。）

一年十一か月　キャッキャッ　「カエル、キャッキャッ、ナイテル。」
チクット　「ハチ、イル。」「ハチ、チクット。」
母「そうよ。さすわよ。」「チクット、サス。」

二年　ギャクギャク　「カエル、ギャクギャク、ナク。」
ポーッテ　「キシャポッポ。」母「きこえたの？」
「ポーッテ。」

二年一か月　ゴロント　「ボク、オコショウ。」（おこそう）
「シャベルデオコショウ。」「ゴロントオコショウ。」
ポテント　父「かきがおちたね。」
「ポテントオチタ。」
ブーブート　「ボク、ウンテンシタ。ブーブートウンテンシタ。」
ヒクヒク　「ヒクヒク、ウゴイテル。」（かえるのおなかが）

二年二か月　グンゲント　父「ごはんたべて大きくなるんだな。」
「グンゲント。」父「そうだな。」
グーグーッテ　「ワンワンガネテル。グーグーッテネテル。」
パタパタッテ　「シャショウサンガ、ハタヲ、パタパタッテフッテタデショウ。」
ステンコロリント　「ステンコロリントコロンダン。」
ギッコンギッコン　「コウヤッテ、ギッコンギッコン、オートバイニノッタン。」
（デパートの屋上で）
グルグル　（まわる様子）（丸をかく時）
パタント　母「しょうじがたおれたでしょう。」
「ボクノアタマノウエニ。パタント。」

二年三か月　ブルーンッテ　「ブルーンッテ、ヒコウキ、オソラニ、トブノヨ。」
サート　「デンシャガ、サートイッテシマッタ。ツギノデンシャニ、ノッタン。」
コロント　「ボールガ、コロントコロガリマシタ。」
ギュウギュウテ　「ギュギュウテ、シボル。」
（以上、五十四語）

ちなみに動詞として用いられているものには、「チョッキンチョッキンスル」「ゴシゴシスル」「プラプラスル」「ウロウロスル」などがある。なお、まだ書きもらしているものもあろうと思われるのが残念である。

四接続の関係

満一年八か月で多語文がめだつようになるが、そのころは格助詞「と」「も」「から」、接続助詞「て」が少しずつ使えるようになっている。一年九か月になって、

メメ、トッタラ、ダメヨー。（おもちゃの犬の目をとってはいけ

ない）と言ったことがある。はじめて条件法を用いた言い方であった。母親の口まねではあるが、ぐん〳〵語彙の増す段階にあって表現の技術としてまず獲得したものではないだろうか。同じころに

タイタイ、イジッチャ、ダメヨー。（金魚をつかんではいけない）

とも言う。こういったところから複文の形へすゝむ現象が見てとれる。

さて接続の関係を、句と句、文と文の二つに大きく分けて考えてみると、今の例では、(1)助動詞の仮定形のばあいと(2)接続助詞のばあいがあり、さらに(3)接続詞の使用とがある。

(1)助動詞の仮定形

タラ（ダラ）　「ツッコンダラ、ダメヨ。」（一年十か月初出）

(2)接続助詞

テ　「デンシャ、ノッテ、イコウ。」（一年十か月）
「パタパタシテ、サメタ。」（同）

カラ　「コワイカラ。」（一年十一か月初出）
「ママ、キテゴランヨ。オモシロイカラ。」（二年一か月）

ナガラ　「ミナガラ。」母「どうするの？」「タベル。」（二年一か月）

ト　「クライアナヲ、ノゾクト、チュウチュウウタガキコエマス。」（二年二か月）

ノニ　「レイコチャン、セッカクネタノニ。」（二年二か月）

テモ　「ボクノフエガナイヨ。オバアチャン。」
おばあちゃん「かばんの中を見てごらん。」
「ナカヲミテモナイヨ。」（二年二か月）

シ　「ボク、イソガシイワ。コレヲスルシ、オサメテルシ。」（二年二か月）

(3)接続詞

ソシテ　「コワカッタ。」　母「そう。」「ソシテナイタ。」（二年一か月）

ソレカラ　母「どこへ行ったの」「オバチャントコ」
母「そう。」「ソレカラオバアチャントコ」（二年二か月）

これまでの観察では、接続助詞の「ので」「ば」「けれども」「たり」が現われてこないし、接続詞は「そして」「それから」がそれぞれ二回ずつ用いられたに過ぎない。日常会話で接続詞を用いる比率が非常に少ないので、子供の言語生活の発達の上にもそれがあらわれるのであろう。こゝに見られる「そして」「それから」は、物語を好むようになった近来使用を覚えたようである。物語を暗誦することから表現法を習得することも今後の問題として興味あることだと思う。

(四)陳述

子供が満二歳になったころたま〳〵与えた絵本（小学館刊・幼児絵本）の中に、「五つぶのえんどうまめ」という物語があった。これが物語にふれた最初で、非常に興味を示して何度も読んでくれとせがんだ。次の章でも述べるつもりであるが、記憶力や想像力がすばらしい勢で発達する時期にあった子供は、海綿が水を吸うように

どん〳〵吸収していった。何度もくり返し読んで聞かせるうちに覚えて、少しずつ自分でも話せるようになる。こうなるとまたうれしくてたまらないらしい。二年二か月ごろには、「おむすびころりん」（小学館刊「めばえ」10月号）「いっすんぼうし」（光洋出版社刊）などを部分的に覚えて口ずさんでいる。また二年三か月目には興味ある現象があらわれた。夕食の時、

アマリニアッイノニ、ビックリシタ。（37・9・27）

と言ったのは、おつゆを飲んで熱かったのであるが、それを「いっすんぼうし」の絵本にあった

三条の大臣とおひめさまは、げたのかげにたっていたまめのようないっすんぼうしをみて、あまりにかわいいのにびっくりしました。

という文によって応用したのである。その時は家族一同大笑いになったのだが、おそろしいような子供の力を感じ、国語教育における短文指導の意義もあらためて考えなおしたいと思った。

一方、満一歳と八か月ころにはようやく表現が文としてまとまるようになってきた。

ボクト、パパト、ボクト、ママト、デンシャ、ノッタ。（37・3・27）

身体の発育も幼児期への移行を示したころである。そして二歳をすぎると自分の体験を伝えようとすることが多くなった。ある日、自分の目にはいるものをすべて母親に伝えようとしたことがあった。

（37・8・25　満二歳一か月）

ヤモリ。（庭でやもりをみつける）

母「あ、やもり死んでるのよ。きたない。」

ヤモリイル。

母「ありが運んでるでしょ。持って行ってるでしょ。」

ドコヘ？

母「ありのおうちよ。」

アリノオウチドコ？

母「土の中ね。どこかそこらに穴があるでしょ。」

ドコ？

母「どこかな。さがしてごらん。」

アリノオウチヘ、モッテクン？

母「そうよ。」

イーショ、イーショッテ、モッテク。

ドッコイショ、ドッコイショト、モッテク。

フモウ。

母「だめよ。ありがかわいそうでしょ。」

（やもりをつまんだので）

母「バイしていらっしゃい。川へ捨てておいで。」

モウ、バイシタ。カワヘバイシタ。

アッチ、ムコウノホウヘ、ナガレテイッタ。

次に、夕食時に昼間の体験を描写して家族の者に話そうとしたことがあった。ちょうど満二歳二か月目であった。

（おばあちゃんが一とおり昼のできごとを話したあと、自分で話をしようとする。）

ヤモリガネー。

父「やもりがどうした？」

ニゲタ。
母「それを見ていたのね。」父「そしたら、柿が？」
オチタ。ポテントオチタ。
父「びっくりしたなあ。」
コワイ。
父「それでぼく、どうした？」
ニゲタ。
父「ぼくにげたのか。」（家族の者大笑い）
それから一週間後は、自分で話せる言葉かずが増し、文が長くなって内容も少しずつ豊富になってきた。
（37・9・6　一週間前、デパートの屋上で遊んだことを話す。）
コウヤッテ、ギッコンギッコン、オートバイニ、ノッタン。
母「そう。おもしろかったね。」「ぼく、ハンドル持ってたの？」
ウン。コウヤッテ。
オジチャンガキタン。
母「はじめ動かなかったのね。」
ウン。オジチャンガナオシタン。
母「そう。それでうごきだしたのね。」
さらに一週間後、主語・述語がしだいにととのってくるし、二文か三文続けるようになる。
（37・9・13）
バスガ、カギカカッテタネー。
母「そう。ぼく見たの？」
ウン。
母「どこで？」
オミヤサンニバスガトマッテタ。
ダレモイナイ。
ウンテンシュサン、ヤスンデタ。
母「パパとお宮さんへ行った時見たのね。」
ウン。ミヨウミヨウテ、イッタ。
はじめのころは、一語だけは言い出せてもあとのことばが続かなかったが、だん〳〵長く話すことができるようになり、聞いている者が全く知らないことでもおゝよその情景がのみ込めるくらいに、過去の経験を述べることができる。そばから誘導的に問いかけたり補ったりしてやればしだいにまとまった話に仕上がっていく。それがとても得意そうである。実験的に、どれほどの長さまで続けることができるか文の数を調べてみたいと思っている。作文指導を進めていく上に考えてみたい幾つかの視点をうかがうことができたのもこのような幼児の話をとらえたときであった。

(4)総括表現

子供の話は部分的でとぎれとぎれである。順序も定まらない。しかし、一つの発達段階として、いくつか話したことばをまとめて最後に表わそうとする文表現があらわれ始める。これはちょうど満二歳二か月目の昭和37・8・30に観察しえたものである。

父「やもりこわいか？」
コワイ。（恐しい）
父「正坊は、こわいもんが多いな。しゅっぽっぽこわいか。」
コワイ。
母「飛行機もこわいのよ。」父「飛行機は？」
コワイ。

ミンナコワイ。

こうした表現は、数概念や抽象概念の発達、記憶力や想像力の発達にともなって見られるものと思われる。すなわち、前段階としては、

母「あーあ、お手手きたないわね。」

リョウホウ、テテ。

母「なあに。あゝ、両方の手々ね。」（37・6・15）

オバアチャンイル。

コッチモイル。

フタツイル。（おばあちゃんが二人いる。）（37・6・28）

などがある。こうして、「ひとつ」「ふたつ」が言えるようになり、上下がわかり、さらに過去のできごとが話せるようになる。そして満二歳ころからいくらか物語を理解するようになる。また、積木あそびで共通な形を並べ、まとまった造形らしいものができるようになったのが満二歳二か月である。少し前の二歳一か月では、紙片をもって手紙を読むまねをしたり、積木あそびでひとりごとを言ったり、想像の世界での遊びが始まっている。これらを考えあわせると、こゝに述べた総括表現が、この後の発達をみる上にも重要なポイントとなることが予想され、幼児の言語活動の技能が習得されていく大切な段階といえよう。

四　結びのことば

幼児の言語生活は毎日が新しい。私どもが反省することも多い。「いろいろな表現法」では、他に「文末表現」「倒置法」「あいさつおよび待遇表現」「依頼・命令表現」「並列の関係」などこまかく挙げればよいのであるが、こゝでは省略する。

これからどん〳〵ことば数や文の数がふえていく時にあたり整理することができたのは幸いであった。未熟な報告であるが、師恩に報いんとする気持をいさゝかなりとも表わしたいと思う。

（昭和37年10月31日）